

大阪市立電気科学館星の友の会「月刊うちゅう」(1989年7月号)より

■中井善寛 「四ツ橋と私」(1989)

PLANETARIUM

四ツ橋と私

中井善寛

この5月の大阪市立電気科学館の移転・新築を機会に、プラネタリウムが50年余のお務めを終わって引退することになった。朝日新聞社からの照会でこのことを知り、自分の歩んできた過去を振り返り、懐かしさとともに、研究の原点としてのプラネタリウムとの出会いについていろいろ思い出したものである。プラネタリウム天文教室の影響を受けて成長した人は多いが、その中で間違っただプロの世界を歩んだ一人の男のお話と思って読んで頂きたい。

私が天文学を志したのは、立志伝中の人のように強い決心や自分の意志によるものではない。一生の路線の大部分はすべて運命と言おうか、少年期の環境や、人生における人との出会いによってなんとなく自然に決っていくもので、自分の場合もその様な流れに乗って、のんびりと過ごして来たものである。

平和で物の余った現在と違って、私の四ツ橋天文教室時代は戦争に突入する寸前の「鬼畜米英」「撃ちてし止まん」「欲しがりません勝つまでは」のスロークーガン時代で、町は戦時色一色に染まり、多分後輩諸子には何とも理解の出来ない、娯楽も玩具も何もかも想像以上に少ない神話の時代でもあった。言い訳になるが、私にとっても、もう50年も昔の話で記憶も定かでない。間違いがあればお許し願いたい。最近あちこちから昔話を聞かれるので、思い出起こしたことを二・三お話したい。

昭和15、6年の頃、私が国民学校3、4年生の時(南十字星を建国の剣星と呼んでいた頃)、元花山天文台長・山本一清博士の天文教室が、夏休みに小学校(国民学校?)

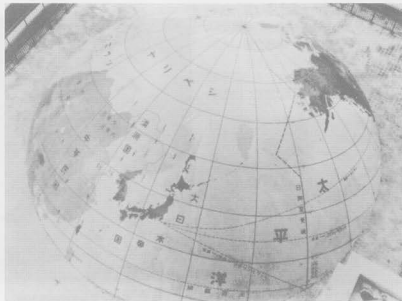


図1：電気科学館屋上の大地球儀

Y. NAKAI

の児童を集めてプラネタリウムで催された。父田同伴で、あたかも入学式の様な雰囲気、プラネタリウムの入口で開場を待っていたのを鮮明に記憶している。扉が開いてドームの中はあたかも夕暮れの雰囲気、照明がともり出し、周囲には大阪の地平線の夜景がシルエットで浮かび上がり、何とも子供心に荘厳な何か神秘的なものを感じさせる舞台作りであった。中央には真っ黒な鉄垂鈴の様なものが浮かび上がり、近づくとも無数の歯車とレンズのお化けのような物で、周囲を完全に圧倒していた。

席につくと、扉が開かれて音楽が奏でられ、微かなモーター音が聞こえ、太陽が西の地平線に近づき夕陽が迫ってくる。トッパリ暮れると満天星に彩られ、客席からは感嘆の声が聞こえた。山本博士のお話が始まった。機械の操作をしておられたのは高城武夫さんだったと記憶している。

巧みな話術と操作で、夏の星座、星座にまつわるギリシャ神話、キリスト生誕のベツレヘムの星、赤道・北極の星空等、自由自在に時間・空間を超えて我々を夢の彼方へと誘ってくれた。星空が作り物等と思う余裕もなく1時間余りの講演・ショーが終わった。この催しは通して1週間ほど続いた様に記憶している。プラネタリウムはカールツァイス社製で、精度の高い且つ寿命の長い、今ふうに言うならアナログコンピュータである。

その後、この魅力にみせられて毎週阿野谷から四ツ橋に地下鉄で通い、お話をうかがった。また、天文教室なるものがあり、高城武夫さん・佐伯恒夫さん等アマチュア(元花山天文台に志願助手としておられ、高城さんは保時、佐伯さんは火星観測に従事)が熱心に子供の相手をして下さった。深夜には屋上で地球儀のモザイクタイル張り(ドーム(図1)の上に覆いこんで流星観測を指導して頂いた。又当時新鋭の25cmカセグレン鏡で火星など遊星(当時東亜天文協会では惑星の事をこう言った)を見学させて貰った。灯火管制下の大阪の空は真っ暗で、天の川が明るかったことは網膜に焼き付いて忘れられない。望遠鏡・機械装置のお話もあった。

特に記憶に残っているのは、そのころ話題のハッブルの膨張宇宙のお話で、「100億



図2：花山天文台の45cm屈折鏡



図3：飛騨天文台の60cm反射鏡

PLANETARIUM

光年の彼方の星雲は光の速度で過ぎかかっており我々からは見えない。これが宇宙の果てである。その先は？』と言うもの。そのころの最大の望遠鏡はワイルソン山の100インチ反射ではなかったか？見えるのは高々20億光年。少年の心に浮かんだ事は「宇宙の果てを見る為の望遠鏡を作ろう!」これが川上新吾君の言う間違いない人生の出発点である。今風に「これっじゃない。結果的には以後その様な路線をたどることになるので、これに依っても、人の一生にとって幼少の頃の心が素直で真っ白なときに、環境・教育の与える影響がいかに大きいかわかる。

そのころの私は引込み思案で人見知りをする方で、両親は医者にでもしたかったのだが、人付き合いができませんとはとうてい無理で、天文学なら一人でこつこつやるのだから何とかなるだろうと思ひこんだ。

父は同郷の鳥養宗大総長、上田宗大(理学部宇宙物理学教室)教授・花山天文台長に相談を持ちかけると、なんと無責任にも、「面白い、いいでしょう」と小学生をつかまえて話を決めてしまった。子供の趣味と専門をごちゃごちゃにすると、当時の学者はなんと大嫌なものだったか。当時役にもたない天文学を志すような奇特な御仁は少なかつたからではなからうか。なんとなく大学は天文志望ということに相成った。

その後、職員の方も一人二人と応召し、集まりも自然消滅した。私も京都に移り中学校、高校、大学を過ごし昭和30年に大学院にはいった。その頃、日本は非常に物理観測面で諸外国に遅れており、宇宙物理学教室に配属されてからアメリカ空軍の中古の光電管や真空管を買い込んで光電測光装置を自作した。以後日本経済の成長と共に宮本正太郎教授の機関研究費が続々と通り、際々、周りを見渡しただけでも70cmシロ口スタット、45cm屈折鏡(図2)、60cm反射鏡(図3)と思つて假もなく製作に専念させられた。60cm鏡は最も思い出深く、博士課程の3年間、新潟の長岡市の津上製作所に出向し、カールツァイス顧問の社長の趣味と一致したのか、採算度外視で思う存分の仕事をさせて貰った。初めての悔いの無い作品である。その後、飛騨天文台建設設計



図4：飛騨天文台の65cm屈折鏡



図5：65cm鏡の15mドーム(手前)

Y. NAKAI

面が始まり、天文台設計、65cm屈折鏡(図4)、15mドーム(図5)、60cmドームレス太陽望遠鏡(図6)と、大物の設計・製作指導が続いた。飛騨天文台の二望遠鏡はカールツァイス(西独)と組んで完成させた物である。その製造期間にオーバーコーヘンの本社を約10回訪れたが、望遠鏡の組み立て工場の隣で、なつかしの四ツ橋の弟分のプラネタリウムを、相も変わらずコツコツと作っていた。今年になってからコンピュータ制御の試作を行っていた。

現在私は、細々と観測結果の解析整約用の画像処理計算機(図7)を手がけ、次なる中口径望遠鏡計画(図8)の設計を始めている。(なかい・よしひろ:花山天文台)



図6: 飛騨天文台のドームレス太陽望遠鏡



図7: 花山天文台の画像解析システム



図8: 京都2.3m望遠鏡計画



スペイン・カラーアルト天文台
3.5m望遠鏡ドームの頂上にて
左からインテンボイメン博士(西独
ツァイス)、ビルクル天文台長、筆者